



本はいつも図書館で借りている。ベストセラーの場合は手元に届くまで何ヶ月もかかることもあるが、返却期限があるために、がんばって読める。自分で購入したら、いつまでたっても「積ん読」である。お正月休みを挟んで3週間も借りていたのに、返す日が迫ってから、上下巻を5日間で必死で読み終えた。

ヴォーリズ建築で有名なメレル・ヴォーリズと結婚した、旧小野藩のお姫様である満喜子の物語である。朝ドラの「あさが来た」の廣岡浅子とも親しく、浅子を第二の母として慕っていた。浅子が満喜子に言う。

「勝とうとしたらあかんのどす。大阪は勝たへんのが華。相手を勝たしてなんぼが商売どす。けどな、負けへんのどす。絶対、自分に負けんと立っとるのどす」

封建的な父親と反目、華族という身分に抗しながら、勉学に励んでアメリカにも留学。在日の外国人宣教師のヴォーリズと結婚して、近江八幡に居を構え、教育者として活躍、戦中の様々な試練や差別にも負けず、満喜子は運命を切り開いていく。

祝いと弔い、出会いと別れ。陰と陽とは繰り返しながら人の世をあざなっていく。

陰陽道でいうと、世の中のいろいろな事に陰と陽があり、陽＝男・太陽、陰＝女・月。今よりは生活範囲も狭く、時の流れも社会の情勢も緩やかであった時代でも、人と人との関係が人生を形作っていったんだろう。

貧しさが女の敵であり、無力さが障害だとは思いつきもしなかった。

貧しいということは、さまざまな障害の元になり、差別を生み出す。今、子どもの貧困が大きな社会問題になっているが、恵まれた家庭環境と貧困家庭では、子どもたちのその後の生き方や性格にまで影響するなんて、理不尽としかいいようがない。

華族である満喜子は身分上、平民とは結婚

できないという決まりを破り、キリスト教の博愛主義で、強く優しい外国人のヴォーリズと結ばれる。

結婚についていちばん望むものは、お互いにとって、疲れているとき、弱っているとき、辛抱強く忍耐強くいられること。互いに我慢し耐える力。長い人生には大切で必要なこと。

私も結婚して40年、夫との生活も慣れたとはいえ、未だに文句言いたいことだらけであるが、もっと我慢せんとアカンはやね。

ヴォーリズって建築でしか知らなかったが、元々は宣教師であり、音楽や会社経営にも秀でて、メンソレータム近江兄弟社の創設者でもある。日本国中、あちこちにヴォーリズの建物が残っている。専門的な建築学も学んでいないのに、関東大震災にも倒壊しなかった堅牢な作りと、温かみを感じる意匠を凝らしたデザインは今でも人気がある。今度はヴォーリズの伝記物も読んでみたい。

廣岡浅子といい、ヴォーリズ満喜子といい、津田梅子、村岡花子等、明治の女性は本当に強い。やはり、明治の時代になってから官制の学校教育が広まり、女性が目覚めたのだろう。功績がありながら、男と違い資料などが少なく、今までなかなか注目されなかった女性が他にもたくさん居ると思う。

ヴォーリズの両親もアメリカから日本へ永住して、満喜子はその親も看取ることになる。いつか、行列のできた近江八幡のクラブハリエのバームクーヘンは、ヴォーリズのお母さんが作っていたのが元になったそう。

人が考えやっっていくことにはこれが決定打であり、これしかないというオンリーワンは存在しない。目的地さえ決まっているなら登山者にとって、そこへたどりつく道はいくつあってもいいのではないか。

絶対的なものはただひとつのみという考えは危うさと背中合わせでもある。

フィクション的な幼馴染の乳兄弟との淡い恋も物語に花を添えて、とても面白かった。

「負けんとき」ヴォーリズ満喜子の種まく日々（上・下） 玉岡かおる 新潮文庫